

小池淳一著

## 『陰陽道の歴史民俗学的研究』

角川学芸出版 二〇一一年二月二八日刊

A5判 iv+四四二頁 八四〇〇円+税

林 淳

陰陽道研究は、村山修一『日本陰陽道史総説』(一九八一年)を皮切りにして、『陰陽道叢書』(一九九一―三年)刊行以降、古代、中世、近世という時代別に分れて進展してきたことについて、ここで繰り返し返す必要はなからう。『陰陽道叢書』以前であれば、卒業論文、修士論文において陰陽道で書きたいという学生が出たとしても、参考文献がない以上、テーマを変えたほうがよいと助言するほうが、学界情報に通じた指導教員の適切な対応であった。しかし時代は大きく変わって、陰陽道を対象にした著作、論文が増えて、卒業論文でも修士論文でも陰陽道をテーマにすること自体は不可能ではなくなった。村山は、『日本陰陽道史総説』刊行を振り返って「学界に余り反響はみられなかった」と嘆じながら、近年(二〇〇三年のこと)では「国公立大学でも陰陽道専攻の学徒が出て、陰陽道史学は格段の進歩をとげた」ことに驚きを隠さなかった(『安倍晴明と陰陽道展』二〇〇三年)。たしかに『陰陽道叢書』前後から、関係の書籍・論文は刊行され、研究の領域を広げてきたことは間違いないところである。本書も、そうした研究史の累積の上になり立ちながら、新たな切り口をしめした歴史民俗学の成果である。著者は民俗学の立場にこだわりつつ、「陰陽道と民俗事象のかかわり」(二二頁)という問題系を近世社会という場において解き明かそうと努めてきた。歴史学的方法に依拠した陰陽道研究が多いなかで、それに伴走しながらも一線を画し、著者は民俗学的方法を活用して陰陽道にアプローチしようとしている。以下、目次をしめし、概要をたどって、その後に評者の疑問点・批判点を提示して書評の責任を果たしたいと思う。

## 第I部 近世陰陽道書の展開

## 第一章 「東方朔」の形成

## 第二章 「東方朔」の展開

## 第三章 「東方朔」の転生―岩手県二戸地方

## 第四章 初期大雑書の位置

―寛永九年板『大ざつしよ』をめぐる

## 第五章 大雑書の受容―津軽地方の場合

## 第六章 大雑書の受容―南島の場合

## 第II部 陰陽道の浸透と民俗の形成

## 第一章 陰陽道系宗教者像

―北奥羽地方における博士とアリマサをめぐる

## 第二章 説話と陰陽道

―青森県下北郡の能舞起源譚をめぐる

## 第三章 民俗芸能と陰陽道―能舞「三番叟」の分析

## 第四章 南島説話と陰陽道

## 第五章 昔話と陰陽道―鬼の呪宝の系譜

## 第六章 暦注の民俗態

## 第七章 民俗信仰と陰陽道―北奥羽におけるイチダイ様信仰

## 結論 近世・近代における陰陽道と民俗

目次を一覧するとわかるように、著者は東北、南島をフィールドの対象として、そこで出会った「東方朔」、大雑書などの陰陽道書が、どのようにして地域の民俗形成に影響を及ぼしたのかを追跡しようとする。

第I部をまとめてみよう。第一章「『東方朔』の形成」では、『東方朔秘伝置文』(一六八六年)をとりあげて、「東方朔」のついでに知識がどのように展開したかをたどっている。もともと占いの一つであった「東方朔」の知識は、近世になって農事にかかわる陰陽道書として成立したことが述べられる。また「東方朔」が、知識人層の伝承・認識が集結した書物となり、伝承を集成した器であったことが指摘されている。第二章「東方朔」の展開では、「東方朔」という名称をもつ民俗事象の存在が、書物との関わりによって探究されて、その伝承は経験の記憶と集積、さらにそれを批判、検討する庶民の営みに結びつくことが明らかにされている。第三章「『東方朔』の転生」では、岩手県二戸地方の三上家伝来の『東方朔秘傳』をとりあげて、筆録者の生涯や民俗的環境を探っている。その結果、書物にない知識でも農事改良に役に立つようなものは「東方朔」として記録されていくことが明らかにされた。「東方朔」は、民

俗的な経験則の集成としての意味があったという。第四章「初期大雑書の位置」では、寛永九年板『大ざつしよ』をとりあげて、その成立の経緯、内容の検討を行っている。その結果、中世の陰陽道書の内容を受けつぐだけではなく、日常生活知識が盛り込まれていたことが指摘されている。第五章「大雑書の受容」では、津軽地方のサンゼソウという大雑書が、庶民生活においてどのように扱われて使用されたかを探っている。第六章「大雑書の受容」では、沖縄県宮古島の集落で個人の守護神祭祀に関わるソウシという書物を検討して、民俗的な実態と大雑書との関係を考察する。第五章と第六章によって、南北に遠くへだたった事例が比較対照され、地域性に還元されない書物の民俗化という重要な視点が問題提起されている。

第II部では、陰陽道の知識が、今日に伝えられる民俗事象の形成とどのように関わっているかについて検討が行われている。第一章「陰陽道系宗教者像」では、北奥羽地方における博士とアリマサの伝承が検討され、それにふさわしい陰陽師の実在は確認することはできなかったが、そのこと自体が考察される。第二章「説話と陰陽道」では、青森県下北郡における能舞の起源譚を再検討して、『簞篋』の説話を換骨奪胎したものであったことを論証する。第三章「民俗芸能と陰陽道」では、山伏神楽である能舞「三番叟」を分析して、『簞篋抄』との類似点を見出している。第四章「南島説話と陰陽道」では、先祖祭祀として行なわれている奄美・沖縄の清明祭をとりあげて、ソウシの由来譚に、陰陽道系説話が投影され、書物の知識が流入していることが確認されている。第五章「昔話と陰陽道」で

は、昔話の鬼の呪宝の話が、陰陽道かその周辺の知識かで形成されていたことが論じられている。第六章「暦注の民俗態」では、三隣亡、半夏生、土用という暦注に関して近世の暦注解説書に記された説明と、全国の民俗調査報告書に採取されたデータとをつきあわせて、暦注がどのように民俗化していくかを考察している。暦注が擬人化される事例なども指摘され、具体的に暦注の民俗化がよく理解できる論考である。第七章「民俗信仰と陰陽道」では、北奥羽におけるイチダイ様信仰が、大雑書の知識が民俗的に再解釈され、個人の守護神神仏への信仰として形成されたことを追求している。資料編には、三篇の「東方朔」、暦注にかかわる資料が翻刻されており、著者から研究者への大切な贈り物になっている。

本書を読み、評者が評価したい点を三点にまとめてみよう。第一に、書物・文字文化の民俗化という視座を提唱している点である。歴史学が文字資料を扱うのに対して、民俗学は口頭で伝えられた伝承を扱うものだという自己規定は、柳田国男以来、民俗学者の心のなかに長くあったと思われる。宮田登は、近世の随筆に都市の民間信仰にかかわるデータが含まれていることを知って、文字資料を利用して近世の流行神、人神信仰を研究したが、著者の場合には、書物の知識・文字文化が民俗を生み出す母体になりうるという、より積極的な意味を書物・文字文化に与えている。民俗学の自己規定において、コペルニクス的な転換がはかられているとあって過言ではなからう。「書物あるいは文字の形で、日常生活経験を束ね、伝え、広めていくことが一七世紀の末頃から可能な状況が用意され」(三七

三頁)、書物の知識が広い範囲に伝播されていって、文字を使う庶民を介して、民俗の形成要因になったと見るのである。近世社会は識字率が高く、文字を書き記録をのこす庶民が多かったことを考えると、著者の提言は大いに説得力をもつ。著者の追い風になっているのは、近世史研究のなかの書物・出版研究の著しい進展であろう。書物自体の歴史的な経緯を調べることによって、細密な歴史を描くという書物・出版研究の方法論は、著者の提言と響きあっている。

第二に、民俗学者の信仰・芸能の研究においては、修験や神子のような宗教者が信仰・芸能・説話を伝播させる役割を果たしたことが、暗黙の前提になっていた。その発想のものは、柳田のヒジリ研究に遡るのであるが、七〇年代以降の修験道研究の展開の中で、信仰・芸能・説話の伝播と定着に修験が介在していたという説明は、枚挙に暇がないほど通説化している。著者は、そうした研究状況に果敢に挑戦して、書物・文字文化を介した信仰・芸能・説話の広がりをも想定して、宗教者の伝播説を相対化しようとしている。全国にある安倍晴明の伝承を調査した高原豊明の研究によっても、安倍晴明の伝承は陰陽師によつて広まったわけではないことが示唆されていた(『晴明伝説と吉備の陰陽師』二〇〇一年)。著者が、宗教者の伝播説を否定はしていないが、一定の歯止めをかけ制限を加えたことは、研究史上の快挙であろう。

第三に、暦注についての斬新な研究である。一方で暦注の解説書を参照しながら、他方で膨大な民俗調査報告書を博搜して、その間をつなぐ暦注の民俗化の具体的な事例をしめしたこ

との意義は大きい。暦注の記載時期は、ある程度確定できるところから、暦注の民俗化も、時代設定を想定可能になった。著者の提言する書物・文字文化の民俗化という視座は、暦注の民俗化を対象にした場合にもっとも効果を発揮し、実証的な資料的な裏づけを得ることができる。暦注の研究が過去に生きた庶民の日常生活の意識を知る上で有効な切り口であることが、本格的に論じられたといえよう。

それでは評者が感じた疑問点・批判点はどこにあるであろうか。第一に、著者の使う「陰陽道」という用語が定義されずに使われている点にある。「東方朔」、大雑書が、「陰陽道書」であるというのは、『安倍晴明物語』、『簗篋』と類似した箇所があることが一つの根拠になっているが、「東方朔」、大雑書の制作者も読者も、「陰陽道」とは考えていなかったと思われる。いわんや東北の民俗芸能や南島の「陰陽道系説話」で、当事者に「陰陽道」の意識はなかったはずである。それにもかからず著者が、それらを「陰陽道」の知識だという場合、史料用語ではなく、研究者側の用語である以上、定義が必要であろう。「陰陽道」の定義とそれを成り立たせる指標が提示されないと、何が「陰陽道」で、何が「陰陽道」ではないのかが不分明にならざるをえない。百科全書的な実用書である大雑書が「陰陽道書」であるならば、近世に出された多くの暦注、暦占いの解説書も、「陰陽道書」になるのであろうか。牛頭天王が「陰陽道の主祭神」(二四九頁)であるからといって、牛頭天王にかかわる事象が「陰陽道」であるとは言えない。本書からは離れるが、牛頭天王を祀る津島天王社の神職たちは、自らの神社を

「陰陽道」だとは認識していなかった。また陰陽道宗家の土御門泰福は、『簗篋』について自家に無関係なもので、真言宗の僧侶が創作したものと述べた(『泰山集』)。このような事例から、牛頭天王、『簗篋』という語彙が出てきたからといって、即「陰陽道」だと言い切ることは危険であることがわかる。しかしだからといって著者の「陰陽道」の使い方が誤りだと評者は思っていない。著者は、「陰陽道」を定義する必要があると言いたいのである。

第二に、著者の選択したフィールドの偏りについてである。陰陽道とは、京都の貴族社会を母体にして成立した、時間と方位の禁忌にかかわる観念や行為と一応は言えるであろう。そうであれば「陰陽道と民俗事象との関わり」の探究を課題とする著者は、京都や畿内(歴代組の陰陽師がいた集落、土御門家が住んでいた名田庄など)に関心を寄せ、そこでフィールドワークを行ない、一篇であろうと論文を書くべきであった。遠隔地である東北、南島の事例とともに、畿内の事例が積み重なれば、「陰陽道と民俗事象との関わり」の研究は、地域の多様さとともに、課題に含まれる難しさや奥行きを明らかにできたのではなからうか。

第三に、評者が本書の中でもっとも評価するのは、第I部、第II部第六章であるが、これらの内容は、「陰陽道」というより、暦注の解説書、暦占いの書物を扱い、暦注の民俗化していく過程を丁寧を描いた「暦」の研究である。私見によれば、室町時代に地方暦が制作されて広く流通して、暦を見て生業や生活の指針として生きる庶民が出てきて、それに応じて暦注や暦

占いに関する書物の需要が高まった。「東方朔」や大雑書は、その先駆的なものであった。幕府の天文方が制作した暦も、種々の暦注を満載していたゆえに、庶民の暦注への関心は、近世を通じて持続して、膨大な暦注や暦占いに関する書物を生み出していった。このような流れを念頭におけば、著者の研究は、「陰陽道」の民俗学的研究ではなく「暦」の民俗学的研究として理解すべきである。

本書を読み、著者がいかに民俗学の立場を維持して、民俗学の王道を歩んでいるかということ、民俗学の外に自らを投企して、広い学術の世界(とくに日本史学、文学研究)との交流に身をさらしてきたのかということを知ることができた。相反する志向性が本書にも刻印されていて、斬新さと古風さ、王道と周縁、過去と現在がせめぎあっている。暦占い、暦注の知識がもつ文化的な意義を確認させた点で、そして書物の民俗化というコペルニクスの転換を、身をもって示した点で、本書の価値は限りなく大きい。あとがきにおいて本書は、恩師である宮田登に捧げられている。宮田に学び、宮田民俗学をこえた研究者として著者の名前は、民俗学の長い歴史に刻まれることになる。

川村清志著

## 『クリスチャン女性の生活史』

——「琴」が歩んだ日本の近・現代——

青弓社 二〇一一年一月二二日刊

四六判 二九二頁 二〇〇〇円＋税

川 又 俊 則

キリスト教研究者ではない著者が非宗教出版社で一般向けに刊行した本書を、『宗教研究』誌「書評と紹介」欄で取り上げるとは、たいへん喜ばしい。評者に任じられたことを光榮に思い、微力ではあるが、以下の記述を持って任を果たしたい。

序 章 ライフヒストリーという物語

第1章 出生から入信まで

第2章 信仰結婚

第3章 牧師の妻

第4章 戦争の闇、栄の出征

第5章 夫の死、新たな出発

第6章 老いの足跡

終 章 祈りの果てに

これが本書の章立てである。第1章から第6章にかけて、ある個人(丸山琴)の生活史が丁寧な描かれた本編と、方法論の